

羽尺物による婦人用あわせ

羽織の裁ち方について

On the method of cutting out the “Hajakumono” cloth, for making ladies’ “Awase-Haori”.

本間小枝子

Saeko Homma

The method of cutting cloth for Japanese Haori depends on the size of cloth, the length of Haori, the presence of gore (“Machi”) and so on.

Two kinds of Japanese cloth for dress, such as “Kijakumono” for Kimono and “Hajakumono” for Haori, can be used for making Haori. The former has enough size for Haori with “Machi” but the latter does not, and some special design is needed for cutting it.

We investigated the problem from literatures and from the inquiries of 193 students who learned the Japanese dressmaking in our collage during these 6 years (from 1970 to 1975).

In the consequence of our investigations about the method of cutting “Hajakumono”, following two methods were available :

- (1) Cutting neck part (“Eri”) and sleeve-band (“Sodeguchi”) out from the space for front part (“Maemigoro”) and gore.
- (2) Cutting sleeve-band and gore out from the space for front part, and cutting 36 cm-width space (“Namihabadachi”) for neck part.

It is recommended that the latter method is first tried, and then the former must be adopted if the size of cloth was not enough.

I 緒言

羽織の裁ち方は用布（着尺・羽尺・シングル幅・ヤール幅・ダブル幅）、羽織丈、羽織のまちの有無などによって異なってくる。

和服地で羽織を裁つ場合は、着尺物と羽尺物とがあり、着尺物では用布が羽織の必要総丈より余裕があるので理想とする羽織寸法に仕立てられる。しかし、羽尺物では用布がある程度限定されるので、まちなしの場合は問題ないが、まちつきの場合は裁ち方に工夫を要する。そこで、それについて検討した。

II 方法

調査の対象は第1表のように、本学の学生和裁履習者、昭和45年度から昭和50年度までの6年間にわたり、合計193名について、羽織の裁ち方に関する調査をおこなった。

【第1表】年度別被検者数

年 度	人 数
昭和45年度	41人
46	37
47	29
48	24
49	30
50	32
合 計	193

III 結果および考察

1. 羽織の素材

教材からみた羽織の素材は第2表のように、天然繊維、天然繊維と化学繊維の混紡、化学繊維の順であり、なかでも交織織物のシルクウール約25%、毛織物のモスリン約24%、また、絹のふうあいを感じさせる化学繊維織物のシルック約18%が多く用いられていた。

羽織の地色は主にえんじ系統で、柄の種類は中柄、そしておとめらしい美しさを表現した花模様が多かった。

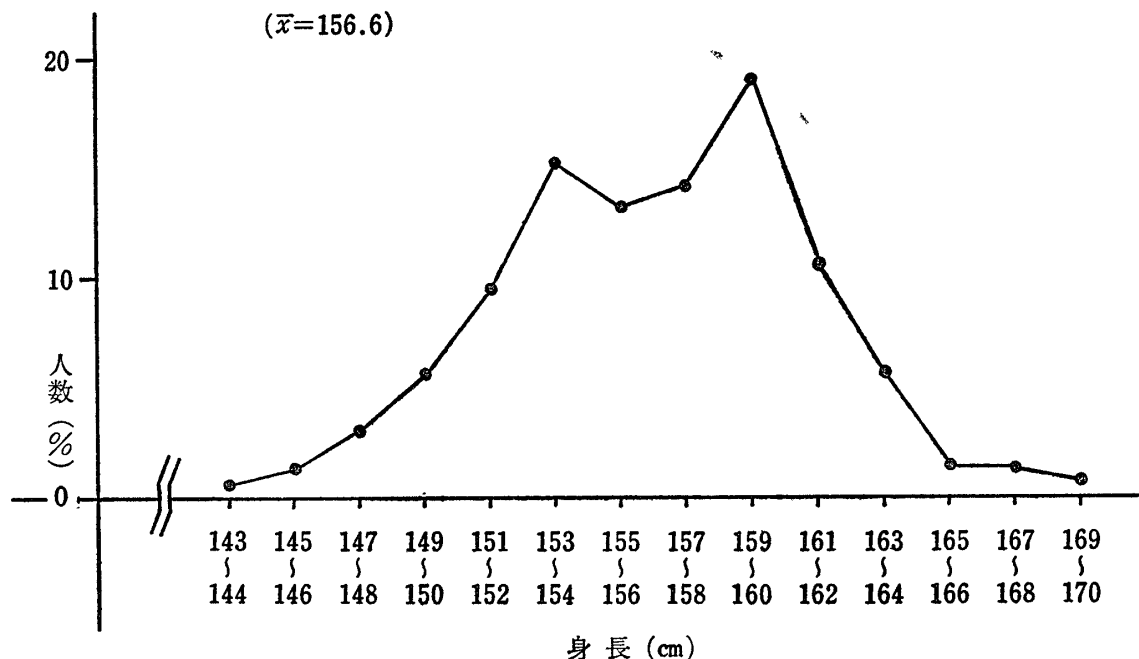
【第2表】羽織の素材

分 類	素 材	人 数	割 合
天 然 繊 維	絹 織 物 (紬 類)	2人	1.0%
	毛 " (モ ス リ ン)	46	23.9
	交 " (シルクウール)	49	25.4
天 然 繊 維 と 化学繊維の混紡	絹とナイロン・アセテート	22	11.4
	毛とナイロン・テトロン	5	2.6
	絹と毛とナイロン・ビニロン	12	6.2
化 学 繊 維	ポリエステル(シルック)	35	18.1
化 学 繊 維 の 各 種 混 紡	アセテート・レーヨン・ ポリエステル・ナイロンの混紡	22	11.4
合 計		193	100

2. 身長分布

身長の分布は第1図のように143cmから170cmにおよんでおり、平均身長は約156.6cmであった。

【第1図】身長分布
($\bar{x}=156.6$)



これを本学の女子19歳の平均身長，昭和50年度の157.4cmと比較すると本調査の方が約1cm低い。また，厚生省の「国民栄養の現状」による女子19歳の平均身長，昭和48年度の153.2cmと比較すると，本調査の方が約3cm高いが，いずれも統計的にみて有意ではなかった。

3. 羽織丈の分布

各人の羽織丈を決める目安としては，便宜上前期に製作した「ゆかた」に半幅帯を用いて，文庫結びの着装をし，その上に有り合わせの羽織をきて，各人にふさわしいと思う羽織丈を観察して決めたものである。これを感覚的羽織丈と仮称する。その結果，羽織丈は第2図のように67cmから87cmにおよんでおり，なかでも75cmから76cmのものが最も多く約31%を示め，ついで，79cmから80cmのものが約24%で，73cm以下および81cm以上のものは少なくなっている。そして，平均羽織丈は約77cmであった。

4. 身長と羽織丈との関係

第3表のように，身長が高くなるにしたがって，羽織丈もやや長くなる傾向がある。そして，身長に対する羽織丈の割合は約48%から52%の範囲であり，なかでも49%から50%のものが最も多い。後述の参考文献と比較しても同傾向にあるので，ふだん着としての羽織丈は，身長約 $\frac{1}{2}$ とみるのが適当であろう。

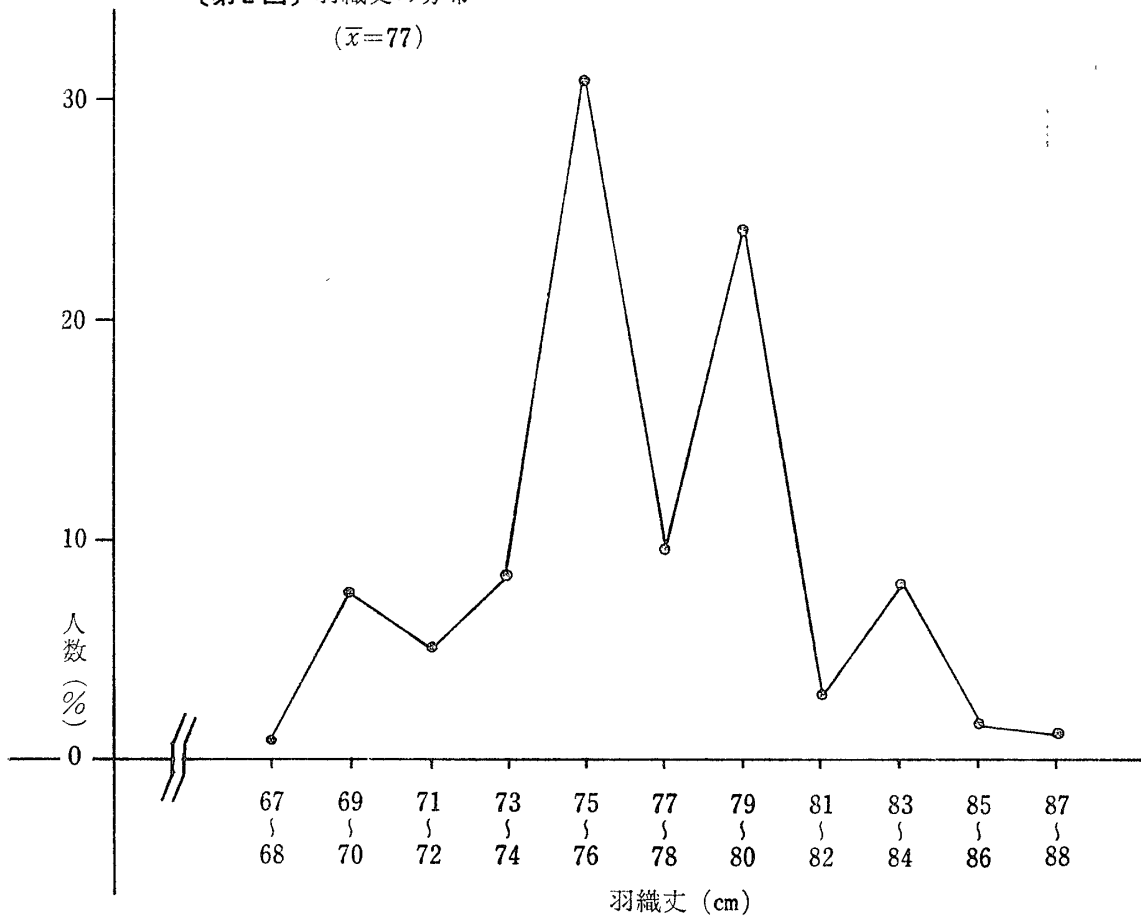
5. 羽尺物の総丈

着尺物の総丈は約11mから約12mの範囲で，平均総丈は約11m30cmであった。ほとんどが11m30cm前後であり，総丈の長さにはあまり差がなかった。

羽尺物の総丈は第3図のように7m10cmから9m80cmにおよんでおり，なかでも8m30cmから8m40cmのものが約27%と最も多く，7m90cmから8m80cmの範囲のものが約87%を占め，7m70cm以下および8m90cm以上のものは非常に少なかった。

【第2図】羽織丈の分布

($\bar{x}=77$)



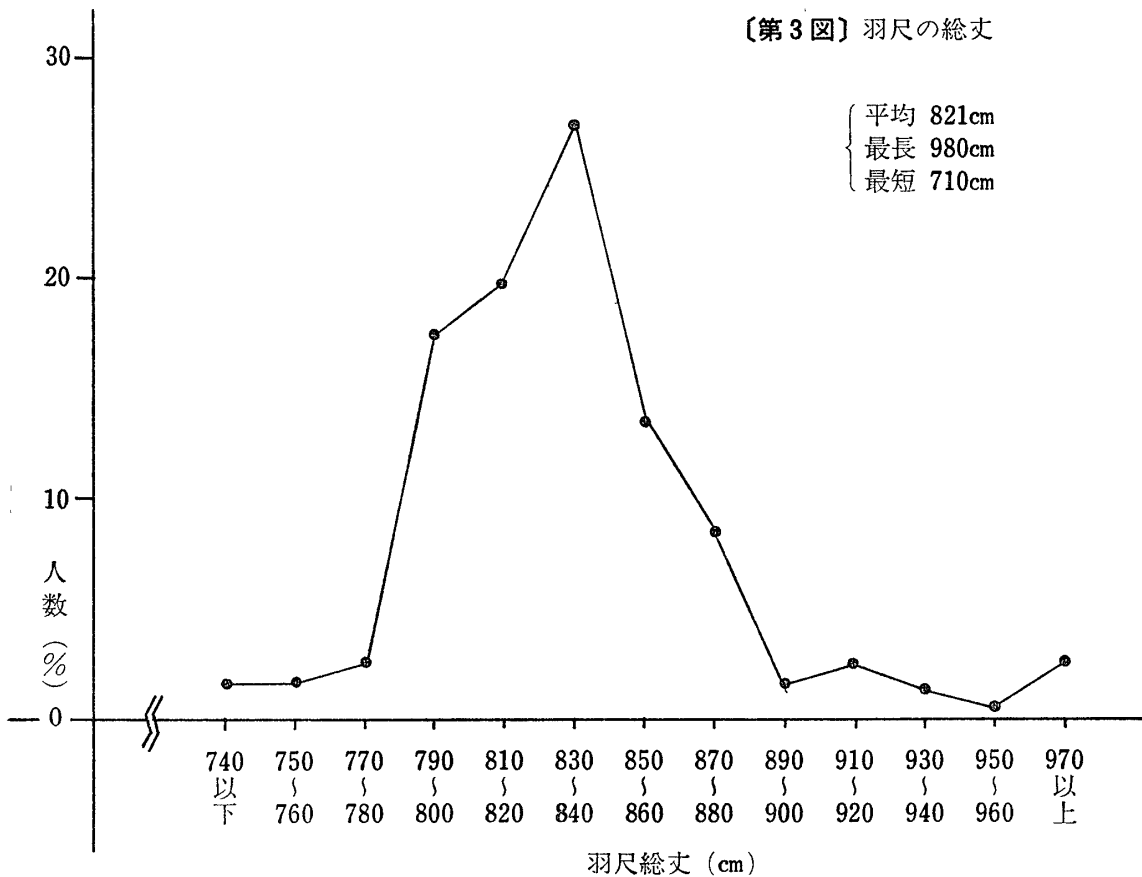
【第3表】身長と羽織丈との関係

身長	人数	羽織丈	割合
143~144 cm	1人	70cm	48.8%
145~146	2	76	52.2
147~148	5	71	48.1
149~150	12	74	49.5
151~152	19	75	49.5
153~154	29	75	48.9
155~156	25	77	49.5
157~158	28	77	48.9
159~160	35	78	48.9
161~162	20	80	49.5
163~164	12	82	50.2
165~166	2	79	47.7
167~168	2	85	50.7
169~170	1	83	49.0

注) 割合は身長に対する羽織丈の百分率

羽尺物の平均総丈は8 m21cmであり、総丈の最長(9 m80cm)と最短(7 m10cm)とでは約2 m70cmもの差があった。この差は羽織の裁ち方に大きな影響があるので羽尺物における長さの規

【第3図】羽尺の総丈



格表示を要望したい。

6. 裁ち方について

羽織の裁ち方については、参考文献 5)~18) よりまとめてみると大体次のようであった。

1) 着尺物の場合

○ 裁ち切り寸法の決め方

① 裁ち切り袖丈 = でき上がり袖丈 + 袖下ぬいしろ
2~3cm

裁ち切り袖口布丈 = (でき上がり袖口 + 5cm内外) × 2

② 裁ち切り衿丈 = (でき上がり身丈 + 余裕) × 2

余裕 = 裁ち切り衿肩あき + 繰り越し + 前下がり + 衿先ぬいしろ
21~23cm 10.5cm 2cm 3cm 5.5~7.5cm

③ 裁ち切り後身丈 = でき上がり身丈 × 2 - (肩から乳下がり寸法 + 8cm内外) + ぬいしろ

④ 裁ち切り前身丈 = 裁ち切り後身丈 + 前後の差 前後の差 = (前下がり + ぬいしろ) × 2
3cm 1cm

注 上記の寸法は一例にすぎない。

$$\begin{aligned} \text{必要総丈} &= \text{裁ち切り袖丈} \times 4 + \text{裁ち切り後身丈} \times 4 \\ &+ \text{前後の差} \times 2 + \text{裁ち切り衿丈} \end{aligned}$$

以上が羽織の必要総丈の基本となる決め方である。

○ 裁ち方図

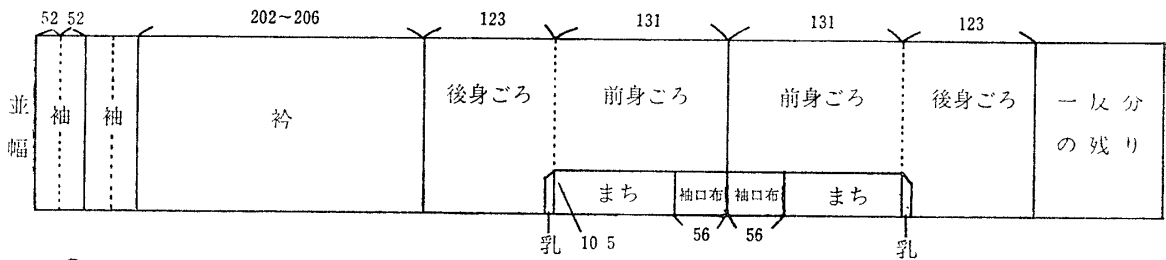
着尺物の場合についてみると第4図1) のようである。

④の場合

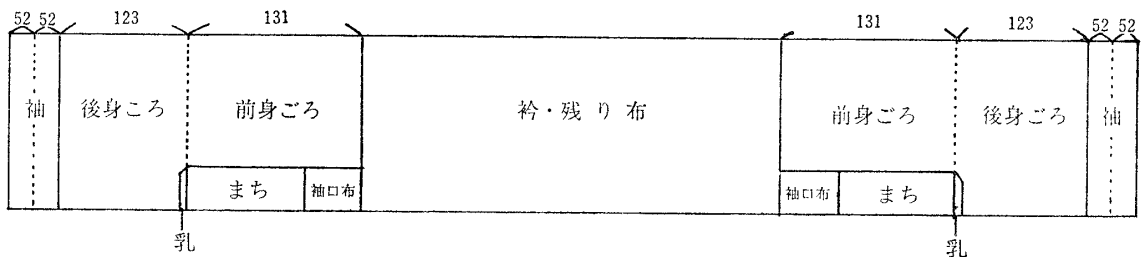
〔第4図〕羽織の裁ち方図

1) 着尺物の場合

㊦



㊦₁



身丈 80cm

必要総丈 918cm~922cm

これは柄合わせを必要としない場合で袖2布, 衿, 後身ごろ, 前身ごろ, 前身ごろ, 後身ごろと裁ち, 前身ごろより, 袖口布とまちとを裁ち出す方法である。

㊦₁の場合

柄合わせを主体として裁つ場合で, 反物の両端をあわせて柄合わせの調子をみながら, 大体袖, 身ごろ, または身ごろ, 袖の順に裁ち, 中央で衿および残り布を裁ち出す方法である。この方法は意外と柄合わせがスムーズにいく基本例である。しかし, 柄合わせの都合によっては順序不同となることもある。

2) 羽尺物の場合

○ 裁ち切り寸法の決め方

裁ち切り寸法の決め方は, 上述した着尺物の場合に準じて決定すればよいのである。但し,

(1) 反物の総丈が羽織の必要総丈より少ないが衿並幅裁ちできる場合,

$$\text{裁ち切り後身丈} = \{ \text{反物の総丈} - (\text{裁ち切り袖丈} \times 4 + \text{裁ち切り衿丈} + \text{前後の差} \times 2) \} \div 4$$

(2) 反物の総丈がごく少ない場合

(a) ゆきを長く必要とし衿を中央ではぐ場合

$$\text{裁ち切り後身丈} = \{ \text{反物の総丈} - (\text{裁ち切り袖丈} \times 4 + \frac{\text{裁ち切り衿丈}}{2} + \text{はぎしろ} + \text{前後の差} \times 2) \} \div 4$$

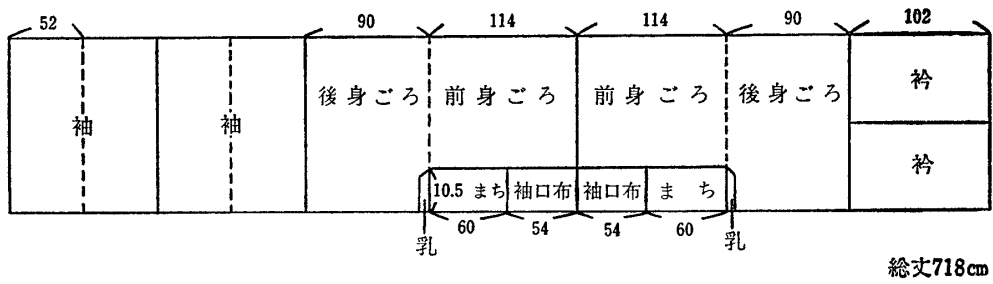
(b) 衿を前身ごろ裁ちにする場合

$$\text{裁ち切り後身丈} = (\text{反物の総丈} - \text{裁ち切り袖丈} \times 4 - \text{裁ち切り袖口布丈} \text{ または } \text{まち丈} - \text{裁ち切り衿丈}) \div 2$$

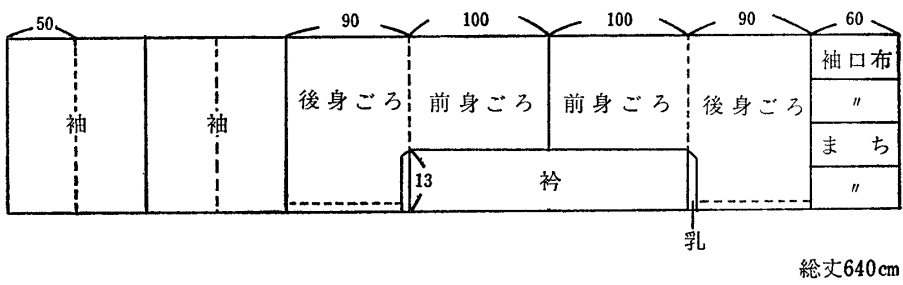
〔第4図〕羽織の裁ち方図

2) 羽尺物の場合

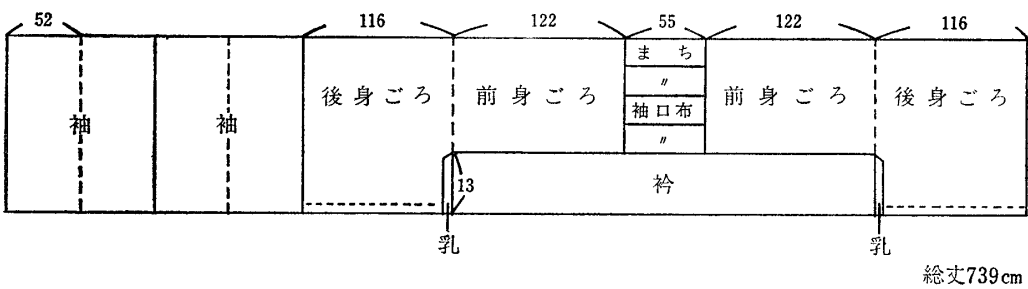
㊸



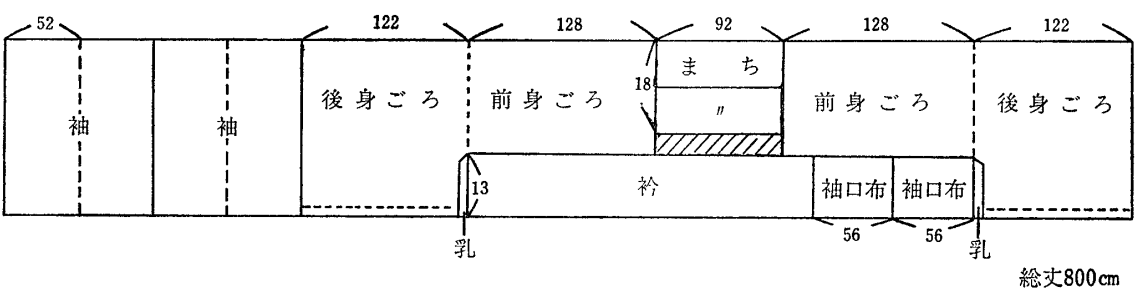
㊹



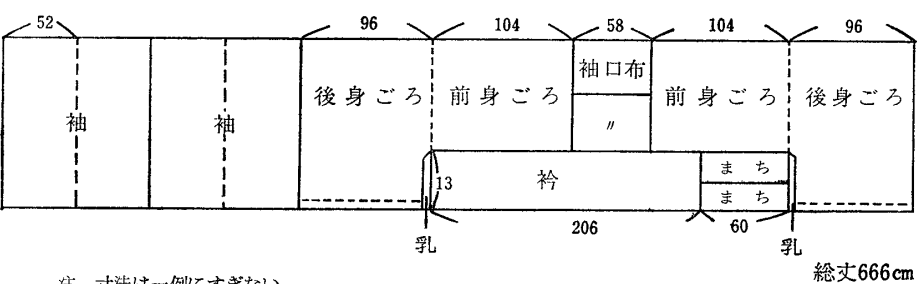
㊺



㊻



㊼



注 寸法は一例にすぎない

(c) 衿を前身ごろ裁ちで胴はぎの位置を、前・後身ごろ、まちともに一直線を目標とした場合
裁ち切り後身丈 = {反物の総丈 - 裁ち切り袖丈 × 4 + (袖つけ + 身八つ口 - まち上ぬいしろ) - 前後の差 × 2} ÷ 5

裁ち切りまち丈 = 裁ち切り後身丈 - (袖つけ + 身八つ口 - まち上ぬいしろ)

大体以上述べた方法によって裁ち切り寸法を決めているが、なかでも(2)の(b)方法による人が多かった。しかし、これは裁ち方において検討を要すると思う。

○裁ち方図

羽尺物の場合についてみると第4図2)のようである。

㊸の場合

衿は「一丈^{ひとたけ}」とり、前身ごろからまちと袖口布とを裁ち、衿を二分して中央ではぎあわせる方法
これは普通よりゆきを長く必要とする場合にやむをえず用いる方法であろう。衿を山はぎにするという欠点がある。

㊹の場合

前身ごろから衿のみを裁ち出す方法

これは和裁の専門家がよく用いる方法で衿丈との関連から前身丈を決めなければならない。

㊺の場合

前身ごろとまち・袖口布から衿を裁ち出す方法

これは、まち、袖口布ともに幅に不足を生じるようである。

㊻の場合

前身ごろとまちから衿と袖口布を裁つ方法

これは胴はぎの位置を前・後身ごろ、まちともに一直線を目標とした場合である。まち丈は用布の都合により短かくして、身ごろに用布をまわしてもよい。

㊼の場合

前身ごろと袖口布から衿とまち丈とを裁つ方法

これは反物の総丈が短かく、㊹の方法で無理の場合に用いるとよい方法である。

なお、㊸から㊼までは参考文献によるものであり、㊹は㊸よりヒントを得た筆者の創案である。

7. 羽織の用尺および羽尺物の裁ち方

文献による裁ち方には上述(6・裁ち方について)したような方法があった。そこで、学生が教材として用いた羽織の用尺および裁ち方についてみると第4表・第5表のようであった。

羽織の用尺で着尺物を用いた人は32%、羽尺物を用いた人は68%で、羽尺物の使用者が全体の約 $\frac{2}{3}$ を占めており、羽尺物の使用者が多いことがうかがわれる。これは、経済的であり、また現代では羽織にふさわしい地質や柄が豊富になり、入手しやすくなったからであろう。

【第4表】羽織の用尺

用尺	人数	割合
着尺物	62人	32%
羽尺物	131	68
合計	193	100

【第5表】羽尺物の裁ち方

裁ち方	人数	割合
衿並幅裁ち	85人	65%
衿前身頃裁ち	46	35
合計	131	100

次に着尺物の場合は 6. 裁ち方について述べたように羽織の必要総丈より余裕があるので、裁ち方においては衿並幅裁ちは勿論、理想とする羽織寸法に仕立てられる。しかし、羽尺物の場合は、羽尺物の総丈のところで述べたように総丈には差異があり、ある程度限定されるので裁ち方に工夫を要することになる。

そこで、羽尺物使用者の裁ち方についてみると、第5表のように衿並幅裁ちにした人が

65%、衿前身ごろ裁ちにした人が35%で、羽尺物でも衿並幅裁ちにした人が多かった。この場合の羽尺物は、羽織の必要総丈より短いものが多いため、胴はぎの位置に考慮を要することになる。

本調査における羽尺物の裁ち方には着尺物と同様、衿を並幅裁ちの様式にする方法と羽尺物の裁ち方②方法による衿前身ごろ裁ちにする方法との二種類であった。

各人の羽尺物でこの二種類のどちらにするか、その決定が問題であると思うが、それについて述べている文献は、石田はる氏の新独習シリーズ「和裁」主婦の友社（昭和48年4月以後）発行による「えり並幅裁ちの総丈の最短限度の知り方」のみであった。即ち、羽尺物の裁ち方においては、この理論を知っていれば便利である。

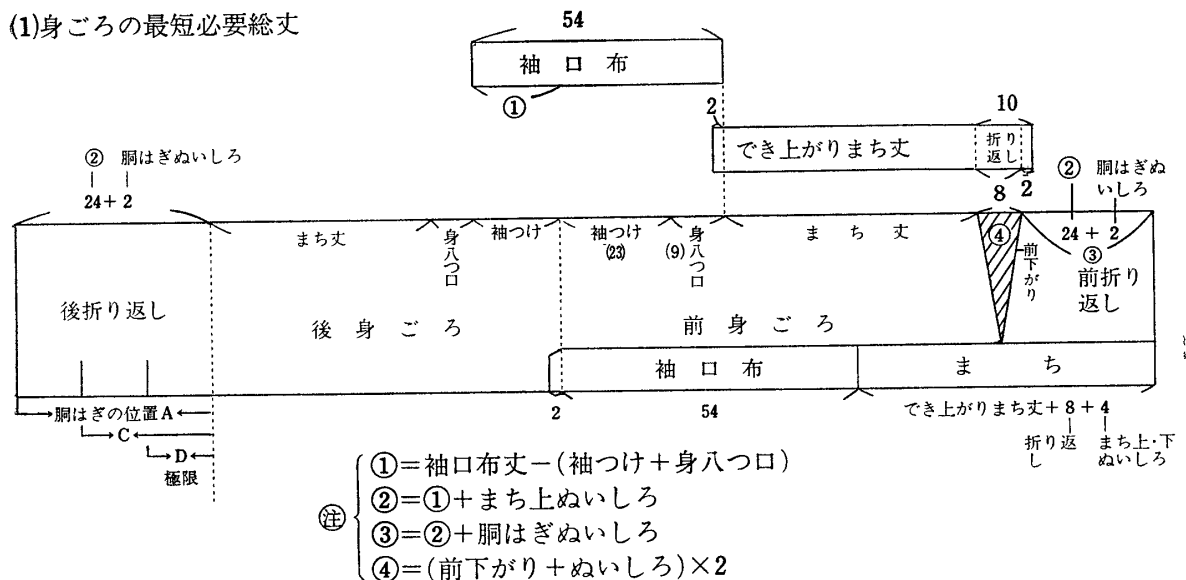
8. 羽尺物で衿並幅裁ちによる最短必要総丈

裁ち切り前身丈の最短必要総丈

まず、衿並幅裁ちにするためには、前身ごろから、裁ち切り袖口布丈と裁ち切りまち丈（でき上がりまち丈+お返し分+上・下のまちぬいしろ）とを裁ち出さなければならない。これが、

【第5図】羽尺物で衿並幅裁ちの最短必要総丈

(1)身ごろの最短必要総丈



裁ち切り前身ごろの最短必要総丈である。そのためには、前身ごろにある一定量以上の用布が必要となってくる。

第5図(1)から

裁ち切り前身丈 = でき上がり身丈 + (前下がり + ぬいしろ) × 2 + ② + 胸はぎぬいしろ
(24cm)

① = 袖口布丈 - (袖つけ + 身入口)

② = ① + まち上ぬいしろ

③ = ② + 胸はぎぬいしろ または ① + まち上・下ぬいしろ

④ = 前下がり分(前下がり + ぬいしろ) × 2

以上の点から、裁ち切り前身丈は裁ち切り袖口布丈と裁ち切りまち丈とを加えたものに等しくなる。

この場合の前胸はぎの位置は②(24cm)であり、まち胸はぎの位置は④(8cm)である。

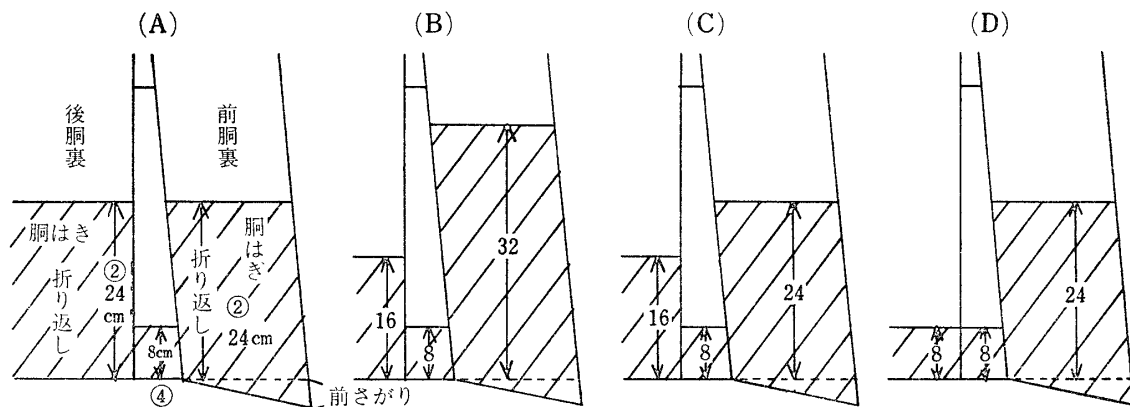
裁ち切り後身丈の最短必要総丈

裁ち切り後身丈の最短必要総丈は、後すそ折り返しをいかにするかによって決まる。

胸はぎの位置については一般的に、前身ごろ胸はぎの位置は、乳より8cm内外下がったところで、前・後胸はぎの位置をそろえろとか、あるいは、後胸はぎの位置を前胸はぎより低くするとか常識的に決められているようである。しかし、裁ち切り後身丈の最短必要総丈の観点から胸はぎの位置をみると第5図(2)のようである。

〔第5図〕羽尺物で衿並幅裁ちの最短必要総丈

(2)胸はぎの位置



(A)は前後の胸はぎの高さが同じである。

(B)は後胸はぎの位置を④(前下がり分 + ぬいしろ) × 2 だけ下げて、その分を前すそ折り返し分にまわす。即ち、その下げた分だけ前すそ折り返しが多くなり、前すそ折り返しが理想とはいかなくとも、それに近づけることができる。

(C)は前胸はぎの位置は一定で、後胸はぎの位置をまち折り返し分だけ下げる。

(D)は前胸はぎの位置は一定で、後胸はぎの位置をまち胸はぎの位置と同じにした場合である。

したがって胸はぎの位置(A), (B)の場合は総丈には変動ないが、(C), (D)のように後胸はぎの位置を下げることによって、必要総丈は、その分だけ短かくてよいわけである。

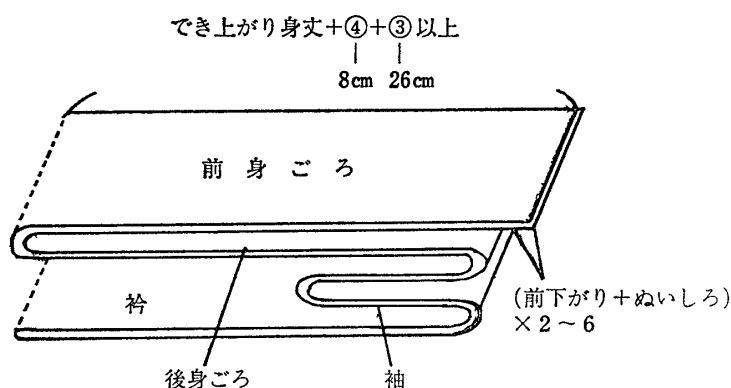
よって、裁ち切り後身丈の最短必要総丈は、裁ち切り前身丈－(前下がり+ぬいしろ)×2～6の式で現わされ、胴はぎの位置は(A)から(D)までの範囲とし、(D)、即ち、裁ち切り前身丈－(前下がり+ぬいしろ)×6(まち胴はきぎと同位置)を極限とするのが適当ではなかろうかと思う。

しかし、以上の観点にもとづき各人の好みにより、胴はぎの位置が見苦しくない、すそ折り返し分を定めることが必要であろう。

そこで、持ち合わせの羽尺物が、衿並幅裁ちにできるかどうかを簡単に調べるには、第5図(3)のように折り積もってみるとよいであろう。

〔第5図〕羽尺物で衿並幅裁ちの最短必要総丈

(3)折り積もり方



折り積もり方

まず、反物を二つに折り、輪を左方におき、裁ち切り衿丈を折り、次に、裁ち切り袖丈を二丈とり、残りを裁ち切り後身丈と前身丈とに分ける。この場合、上述した、裁ち切り前身丈の最短必要総丈と裁ち切り後身丈の最短必要総丈、即ち、まち胴はぎと同位置の極限のすそ折り返し分を裁ち出さなければならない。もしも、この方法で用布が不足する場合は、衿を前身ごろ裁ちの方法によるほかないのである。

しかし、用布がわずか不足の場合は、袖口布丈、身丈、身八口などで加減して調節してもよいであろう。

9. 衿並幅裁ちによる羽織丈と最短必要総丈の目安

本調査における、羽織丈の分布をもとにして、裁ち切り袖丈52cm、前・後身ごろの胴はぎの高さは同位置として、羽織の最短必要総丈の目安を求めると第6表のようである。

これによると、羽織丈が約5cm長くなるにしたがって、総丈も約30cm長く必要となってくる。

最近は体位が向上しているので、ゆき丈も長くなる傾向にあり、衿を前身ごろ裁ちにす

〔第6表〕衿並幅裁ちによる羽織丈と最短必要総丈の目安

羽織丈	最短必要総丈
65 cm	約 765 cm
70	795
75	825
80	855
85	885
90	915

④裁ち切り袖丈52cm

ると、背ぬいで約4cmぬい込むので肩幅が狭くなり、ゆき丈にも制限されてくる。そこで、できるならば、その懸念をなくすために衿を並幅裁ちにすることが望ましい。

したがって、衿並幅裁ちによる平均羽織丈と最短必要総丈との関係からみると、羽尺物の総丈は約850cm以上必要であるが、市販の羽尺物の総丈は、まだ850cm以下のものが多い。このことから勘案して、羽尺物の総丈が約900cm前後の市販を要望したいと思う。

IV 総括

以上の結果を総括すると次のようなことがいえると思う。

1. 教材からみた羽織の素材は主にシルクウール、モスリンなどであり、羽尺物には、化学繊維の絹のふうあいを感じさせる、シルックが多く用いられていた。

2. 羽織丈の平均は約77cmで75cmから80cmの範囲のものが多く、羽織丈は、身長約49%から50%であった。したがって、羽織丈は身長約 $\frac{1}{2}$ とみなすのが適当であろう。

3. 本調査における羽尺物の裁ち方には、大体次の二方法に分けられた。

(1) 衿を並幅裁ちにして前身頃から袖口布と、まちとを裁ち出す方法（着尺物の裁ち方に準ずる方法）

(2) 前身頃とまちから衿と袖口布とを裁ち出す方法

二方法のどちらを用いるかは、前述した前身ごろの最短必要総丈と後身ごろの最短必要総丈における胴はぎの位置が極限の場合でも、なお用布が不足する場合は、(2)の方法によるほかないのである。

4. 羽尺物の総丈の平均は約821cmであり、最長（980cm）と最短（710cm）との差がかなりあるので品質表示と同様、羽尺物の総丈の表示、ならびにできるならば、現在市販の羽尺物には850cm以下のものが多いことから、衿並幅裁ちにできる総丈850cm以上900cm前後の市販を要望したいと思う。

最後に本研究について、御懇切な御指導を賜りました、本学講師、石田はる先生に厚く感謝の意を表します。

（本研究は、日本家政学会関東支部において、1976年6月発表したものである。）

参考文献

- 1)北村哲郎；日本服飾史（衣生活研究会）
- 2)掘越すみ；日本衣服裁縫史（雄山閣出版）
- 3)川上達也；被服科学の概説（衣生活研究会）
- 4)平沢猛男・成瀬信子；被服材料学（文化出版局）
- 5)椛山藤子・ほか4名；被服構成（広川書店）
- 6)増田茅子・枝広瑤子・安原由紀子；被服構成学（相川書店）
- 7)高橋春子・今井和子；被服構成学（建帛社）

- 8)池田富美；和裁（日東書院）
- 9)石田はる；和裁（主婦の友社）
- 10)池部芳子・川村キミ子・佐野恂子・柴田志げゑ・田尻寧子・永井房子；新和服裁縫（建帛社）
- 11)稲垣和子・曾谷愛子・高田あや子；現代の和裁（建帛社）
- 12)大塚末子；新しい和裁（同文書院）
- 13)滝沢ヒロ子；新しい和裁全書（永岡書店）
- 14)同　　上；和服裁縫（婦人生活社）
- 15)土井幸代；和裁（同文書院）
- 16)成田　順・石原アイ・和裁の研究（同文書院）
- 17)清水とき；きもの全科（家の光協会）
- 18)婦人生活出版部編者；和装と和裁（婦人生活社）
- 19)前川喜重子；羽織の歴史的な研究（日本風俗史学会誌　第13巻第4号）